

第6回 「日本語大賞」

テーマ

^{いま} ^{つた} ^{ことば}
「今、伝えたい言葉」



一般の部 優秀賞 受賞作品

千自由百自在

香川県

上村 豊弘

子どもの頃、実家の床の間に掛軸が一幅掛かっていた。そこには走るような闊達な筆づかいで「千自由百自在」と書かれていた。

どんな意味かと父に訊くと、「千個、自由にやりたいことがあっても、実際に実現できるのは百個、という意味だ。」と父は幼い私に教えてくれた。人生とは、なんでもかんでも自分の思い通りにはならないものなのだ、と。

なんてつまらない掛軸なんだろうと、子どもごころに私は思った。

千個のうち、たった百個しか思い通りにならないなんてつまらない。ぜんぶが思い通りになればいいのに。どうせ掛軸にするなら「千自由千自在」、いや「千自由万自在」のほうがいいに決まっている。

ながらく、そう思ってきた。

月日が経って、私は高校を卒業したが、受験に失敗して浪人生になった。獣医になりたかったが、努力不足でついにその道には進めなかった。その後、文系の大学に進んだが、学びたいことが途中でわからなくなって、ついにリタイアしてしまった。私は地元に戻ってアルバイト先を転々とした。そのうち、縁あって地元の警備会社が僕を拾ってくれた。いま私は機械警備員として、夜の街を走りまわっている。

掛軸のことなど、すっかり忘れてしまっていた。

先日、所用で久しぶりに実家に帰ったとき、私は父に挨拶をするために座敷に上がった。以前父は小さな会社の経営者だったが、いまでは後進に道を譲って、悠々閑々の日々を過ごしている。やや痩せたように見える父は静かに私を迎えた。

「仕事は順調か。」

「うん。」

「そうか。」

父は藍染の着物を懐手にして、泰然と座っている。私はなんとなく気詰まりで、父の体調のことなどを訊ねた。

「ちよっと痩せたんじゃない？」

「いま断食をしているんだ。もう三日、なにも食べていない。酒もやめた。」
酒豪の父が酒をやめたと聞いて、私は驚いた。

「断食？ よけいからだに悪いんじゃないの？」

「余計なものを入れないのがいいんだな。」

父の思いつきは今に始まったことではない。何をするにせよ、やり始めたら最後までとことん徹するのが父の性分だった。

「母さんは二階？」

「ああ。」

母の部屋へ行こうと思い、ふと脇を見ると、そこになつかしい文字があった。

千自由百自在

その掛け軸は、あいも変わらず狭い床の間に、しんと掛けてあった。日に焼けて縁が反り返っていたが、勢いのある字体があの頃のまま、空を切るように書かれてあった。

その掛け軸を久々に見て、待てよ、と私は思った。

これは千個、やりたいことがあったとしたら、百個は実現できるんだ、という前向きな掛け軸ではないのか、と不覚ながらに思い当たったのである。

それは単純に、白が黒に見えたということではなかった。

私は人生を生きていく上で他の人と同じように、いろいろの失敗を経験してきた。それ乗り越えようといろいろの試行錯誤を重ねてきた。しかし再び失敗をくりかえして、その都度じたばたとした。そうこうするうちに、人生の中で十分の一が叶うというのは、なかなかの高確率だ、と私は自然に思うようになっていたのである。

コップに入った半分の水を、半分も水が入っていると、自然に思うようになっていた乾いた自分を、鏡に映った自分を見つけるように、私はそこで発見したのだった。

曲がりながらも人並みに人生を歩いてきて、多少傷だらけになった私には、昔と同じ掛け軸が、その風景が、異なって見えたのである。

それが大人になるといふことなのだろうか。

私は嬉しいような悲しいような、なんともいえない感慨深い気持ちを抱えて座敷を辞した。

ある日の食事の席で、私は父にそのことを話した。酒が入って上機嫌の父は「そう、百個も自在になるなんて最高だ。」と笑った。

「でもまだまだ半人前だな。」

「どうして？」

私が訊ねると、父は急に酔いが醒めたように肅然とした目で私を見据えた。

「千自由百自在の前には『人事を尽くして』という言葉がつく。人事を尽くして天命を待つ。その上で、千自由百自在だ。最近はどこでも、なるようになるとか、去るものは追わずとか、天命を待つことばかりが強調されるけれどね、人事が尽くされなければ自在になるものもならんようになる。あれは人事を尽くせ、という意味の掛け軸なんだ。」

と父。

もうすぐ古希を迎える彼の顔には、いままで気づかなかった深いしわがいくつも刻まれていた。

父もまた、幾多の失敗と挫折を重ねてきていた。私のそれよりもはるかに多く、彼は人生を歩いてきたのだった。

はるばるここまでやってきたと思いついていた私は、まだまだ道に先があるということ为先達に教えられたのだった。

千自由百自在。

もう少し先まで歩いていったなら、その言葉にはまた別の意味が表れてくるのかもしれない。その先には、また新たな景色が開けているのかもしれない。そこにはどんな風景が広がっているのだろうか。

その日、父はいつになく饒舌で、よくお酒を愉しんだ。断食などとうに忘れている様子だった。

そんな父の背後に、その掛け軸はあの頃のまま、しんと掛けてあった。